「人間力」を鍛える

結城　章夫
（国立大学法人山形大学　学長）

一　日本は「学歴社会」か

これまで長い間、「日本は学歴社会である。」と言われてきた。私は、これは正しくないと思っている。

企業の採用試験では、その人が会社に入ってから伸びていけるポテンシャルを持っているかどうか、何事にも挑戦していく意欲や情熱があるか、失敗してもめげない気力や胆力を備えているかが厳しく問われると聞いている。出身校の名前にこだわって社員を採用するような企業は、厳しい国際競争の中で生き延びられないのである。

私のこれまでの人生経験を振り返ってみても、官庁や会社で成功するかどうかは、その人に与えられた仕事をやり遂げる気力と体力があるかどうか、他者とコミュニケーションがとれて協働できるか、そして何よりも、周りの人から信用され、信頼されるかどうかで勝負が決まってきたと痛感している。

日本は、相当以前から、「学歴社会」ではなくて、「実力社会」になっているのである。

二　小中学校・高等学校への期待

小中学校や高等学校においては、知識や問題の解法を詰め込んで、偏差値の高い高校や大学に進学させる受験教育を行うだけでは十分ではない。私は、一人一人の子どもの一生の幸せを考えれば、長い人生を強く、豊かに生きていくための「生きる力」を育てていくことが何よりも大切なことだと思っている。この「生きる力」とは、知・徳・体のバランスの良い育成によって初めて身につけられる総合的な力だと考えている。

平成一四年四月から実施されている今の小中学校の学習指導要領では、このような「生きる力」の育成を基本的な目標に据えている。以前の詰め込み型の教育を見直して、教える内容を基礎的・基本的な事項に厳選し、児童生徒に時間的・心理的なゆとりを持たせることになった。また、自分の頭でしっかりと物事を考え、自分の考えをまとめ上げ、発表する能力を育てるため、新たに「総合的な学習の時間」が導入された。

その後、学力が低下したとの強い批判を受けて、平成二〇年春に告示された新しい学習指導要領（小学校は平成二三年度から、中学校は平成二四年度から実施される。）では、総授業時間数を一割程度増加させ、理数教育を強化するなどの見直しが行われた。しかしながら、「生きる力」を育てるとの基本理念は、いささかも揺らいでいないのである。

私は、小中学校及び高等学校では、知育、徳育及び体育の三つがバランス良く実施され、自己中心ではなくて、他人を思いやる優しい心を持った児童生徒を育成してもらいたいと思っている。そのような教育こそが、「実力社会」を生きていく力の基礎を造ることになると考えるからである。

三　これからの大学教育

それでは、大学の教育では、何を目指すべきだろうか。

大学では、それぞれの学生の専攻分野に応じて、将来職業人として必要となる専門的な知識や高度な技能を学び、身につけることが基本である。しかしそれに止まらず、将来の長い人生を強く豊かに生きていくための人間としての総合的な力、「人間力」を育てる必要があると考えている。そのためには、専門教育と並んで、教養教育が極めて大事である。

大学設置基準の大綱化以降この二〇年ほどの間に、全国の大学では、教養部の解体、専門教育の重視などにより、教養教育の弱体化が進んできた。私は、いまこそ教養教育の重要性を再認識し、教養教育を再構築していくべきだと考えている。

四　山形大学の教養教育の再構築

私は、平成一九年九月の学長就任にあたり、山形大学の経営の基本方針として、「教育、特に教養教育を充実させる。」を掲げた。山形大学においては、これを具体化するために、この二年間、教養教育のカリキュラムの全面的な見直し作業を進めてきた。

現在の山形大学の教養教育では、五〇〇を超える科目が開講されているが、その科目揃えを見ていくと、私は、教員が教えたい科目が多く並んでいるように感じている。一方で、大学生であれば必ず学んでおくべきことがあるのではないかと思っている。私は、現在のカリキュラムが「教員中心」になっているのであれば、それを「学生主体」のものに再構築するべきだと訴えてきた。

また、現在の教養教育では、学生が自分で履修科目を選択し、決定する「アラカルト・メニュー」になっている。柔軟で多様なカリキュラムが組めるとの利点もあるが、どうしても学生が興味や関心に流され、栄養が偏ってしまう心配がある。やはり、学生が学ぶべきことを「定食メニュー」として大学が責任を持って提供することも必要だと考えている。

以上の二点を基本にして、入学後一年間の教養教育の見直しを進めてきた。その際、学生の「人間力」を鍛

え、磨いていくことを重視した。そして、二年目以降の専門教育と卒業してからの生涯学習の基盤を造っていくような教育にしたいと考え、この新しい教養教育を「基盤教育」と呼ぶことにした。

今回のカリキュラム見直しのポイントは、二つである。

一つは、必修二単位の「導入科目」を設定したことである。大学教育や大学生活への円滑な接続を図り、自立して学ぶ姿勢を身につけさせることを目的に、スタートアップセミナーや合宿等を行う。学部・学科毎の出来るだけ少人数のクラス編成とし、所属学部の教員が担当する。共通テキストも作成することにした。

もう一つは、「基幹科目」を編成したことである。「人間を考える」と「共生を考える」の二領域を設定し、それぞれに一五～二〇科目を開講する。各領域二単位、計四単位を必修とした。人間とは何であるか、人生をどう生きるべきかといった根源的な問いは、大学生であれば一度は突き詰めて考えておくべき人生の基本問題である。この基幹科目で、このようなことをじっくりと考えていくきっかけをつかんでもらいたいと思っている。

山形大学の新しい教養教育、「基盤教育」を企画し、評価し、不断に見直していくための責任組織として、平成二一年一〇月、「基盤教育院」を設立した。現在、専任教員が一〇名であるが、さらに、基盤教育に情熱と使命感を持った教員を五名程度、大学の内外から集めてくるつもりである。そして、平成二二年四月の新入生から、この新しい「基盤教育」を提供することにしている。

五　「生きる力」を基礎に「人間力」へ

小中学校及び高等学校で育てられた「生きる力」を基礎として、山形大学では、それをさらに強い「人間力」として鍛え上げていきたいと考えている。そして、卒業生がどのような職業に就くにしても、立派に社会に貢献し、長い人生を強く豊かに生きていける力をつけさせてあげたいと心から願っているところである。